

◆知財の活用と『シグナル効果』

最終処分場と聞くと、一般的には、新設の際の住民の反対運動のイメージや、既に稼働している施設でも、山奥で人目につかないところで埋め立てが行われている負のイメージがあるが、最終処分場で脚光を浴びている会社がある。

焼却灰とセメントとを混練して固化させ、さらに、それを区画毎にモルタルでキャッピングさせていく工法を確立し、福島第1原発の事故以前から無害化を進めていた株式会社フジコーポレーション(長野県)である。

この会社の処分場は、HPの写真にもあるように、高速道路も近くを通る農村地帯の平地にある。

さらに、処分場内の作業の様子は、HP上のライブカメラで公開されている。

このように、最終処分場に対する負のイメージ(悪臭・投棄)を180度変える処分場と言える。

企業のイメージを払拭する知財戦略
弁理士 酒井俊之

すなわち、権利行使のための知財とは全く異なる。

《知財のシグナル効果とは》

このような知財の活用は、知財のシグナル効果と呼ばれるものである。

シグナル効果とは、通常、学歴や名刺の肩書きのようなものであり、これにより相手方に信頼性や信用を与えるものである。

特に、知財のシグナル効果では、過大広告と区別される。すなわち、自社の技術や製品の良さを過大広告的にアピールするよりも、審査を経て権利化された特許を取得することで、その会社や製品の信頼性や信用を確立できる。

株式会社フジコーポレーションの場合には、まさしく、最終処分場に対する安心・安全の確立のために知財を活用しており、知財のシグナル効果が十分に発揮されている例と言える。

この会社の場合には、自社開発した技術は、すべて権利化した上で、権利化した特許・実用新案・商標をすべてHP上に公開している。

また、近年は国立環境研究所とも共同研究を行っており、多面的に、最終処分場に対する安心・安全を確立させている。

何が正しいのかも見失われがちな時代において、正しいものをしっかり正しいとアピールできるツールとして、知財のシグナル効果を活用することも重要であると思われる。




この会社の知財戦略は、最終処分場に課される一般的な基準(最低基準)を超える高いレベルでの技術開発(自社規格)を行い、これを権利化することで、処分場に対する安心・安全を確立する点にある。

◆プロフィール◆ 酒井俊之(さかいとしゆき)

1976年生。福島県伊達市出身。慶応大学院基礎理工学専攻修士課程修了。03年弁理士試験合格。04年弁理士登録。同年、創成国際特許事務所に入所。08年、福島事務所開設に当たり所長に就任。

地方公共団体や新聞社主催の各種セミナーの講師として活躍する一方、事業モデル『知財制度の活用戦略』を展開。出願から20日で登録査定という早期の権利化モデルを実現。

東宝経済産業局特許室『東北地域知財経営者及び知財活動復興支援事業』総括委員。東北工業大学非常勤講師など。



環境省の平成24年版の「環境白書」から、『わが国に眠る地上資源の発掘・活用』のデータから、日常的に使用されている携帯電話の本体(約140万)から『金』48mgが抽出されるという。金額にして約200円に相当する。

鉱山から採掘される天然資源には限りがあることは誰もが知るところですが、『金』48mgを鉱山で鉱石52.8kgを採掘するのに匹敵するという。

日本で1年間に4000万台以上の携帯電話が消費されているいうから、100%回収されたなら

気になる数字…48ミリグラム 携帯電話1台に含まれている金の量

約2トンの『金』(約80億円)が回収できることになる。



すでに「家電リサイクル法」「資源有効利用促進法」「自動車リサイクル法」などにより回収された物から金、銀、アルミ、タングステン、ネオジム、など多種類のレアメタルが抽出されることから『都市鉱山』と言われている。

25年4月には「小型電子機器等リサイクル法」が制定され、本格的に資源の再利用に向けた事業が展開される。しかし、課題となっている都市鉱山から抽出する際の費用対効果だと言われている。

自然エネルギーとの組み合わせで解決できると良いのだが…。

「被害者意識」は、その人が原因を作っている?…

頻繁にある事例ではないのですが、相談者の中に『被害者意識』が強すぎるがために、問題解決のルーチンに入ることができずカウンセラーにとって試練の時と暫く様子を見ます。

経営破綻に直面したとき、発注量を減らしてきた親会社の問題と嘆いたり、金融機関の対応を恨んだり、社員の行動を批判したり、その人の“被害者意識”は周囲のあらゆる人々に向けているから始末が悪い。

その人が“被害者意識”に陥っている状況とは、自分がしていなければならない事を投げ出している状態になっているのです。

本来ならば自分がしなければならないことなのに、自分にその処理能力が無いと感じたとき、突如、被害者の立場に回り、周辺にいる関係者に問題を処理させようと働きかけ、責任放棄をした本人は“被害者”(弱者)として振る舞うので、周囲の関係者は問題を放置しておくわけにもいかず、援助を強要される形になることを当然のことのように見ているのですから困ったものです。

“被害者意識”の強い人は、自分の人生を自分自身の力で切り拓こうとしている人ではなく、自分の人生を、いま対峙している相手に委ねて(=支配されて)いる状況にあるのですから、何処かで解決していかなければなりません。

強く抱えている“被害者意識”を取り去る方法としてカウンセリングでその人の感情を肯定と共感して、徐々にその意識を取り去るのは当然ですが、私の場合には『O ring Test(オーリングテスト)』を何度か繰り返し、それまで対峙していた人達への敵対心を小さくしていくという作業をします。

あるカウンセラーセミナーにおいて、相模女子大学・石川勇一教授の『被害者意識はその人が原因を作っている…』という言葉が大変印象的でしたが、原因を取り去る作業には“一定の時間”と“信頼関係の構築”が不可欠のことであると思っています。

今まで直面したことがない事態に接したとき、普通の人なら気が動転して、混乱するのは当たり前のこと

リスク・カウンセラー奮闘記 108

だから、カウンセラーが受容できる器さえもっていれば、事態の收拾は用意であると考えられます。

「起きたトラブル」の解釈で苦しんでいる…

どんな大きな問題であっても所詮人間社会で起きた問題であれば、何らかの方法で解決することができるはずである。

宇宙観で捉えれば、地球には北(N)の磁極に対して南(S)の磁極があり、夜の時間は永遠ではなく必ず昼の時間がやってくる。大自然が織りなす地球自身の営みを変えることはできなくても、それらの恩恵を受けることなら誰にでもできることである。

ましてや、トラブルの大小を問わないまでもなく、その原因の殆どは人間自身が生み出したものばかりですから、自分の心の持ち方一つでどのようにも解決できるものばかりです。

ふたたび石川勇一教授の言葉になりますが、人々は『起きた問題の事で苦しんでいるのではなく、出来事の解釈で苦しんでいる』と談じている。

トラブルが起きたとき、起きた問題の本随について苦しみ悩んでいる人は殆どいないだろう。起きた出来事の解釈は人様々であって、個々の人の立ち位置が異なるだけでも受け止め方は大きく異なるから厄介なのだ…。まさに『一月三舟』の例えそのものだ。

「止まっている舟から見る月は動かず、南へ行く舟から見る月は南に動き、北へ行く舟から見る月は北へ動くように見える…」ということだが、受け止め方一つで解釈が変わるということだから、冷静になってそれぞれの立場で解釈することによって、怯えたり、恐れられたり、苦しんだりする必要が無かったことなのかも知れないのに、混乱するのも人間だからなのだろうか。

「分け合えば余り、奪い合えば足りない…」
「相手の立場で考えてみる…」などと相続トラブルなどの問題解決の際に使う言葉ですが、競わなければ楽な人生なのに…と思うのです。



富貴への道

再生・再起への道

起死回生への道

ご利用ください! 『経営危機から家族を守る!』のしおり

このキーワードは、リスク・カウンセラーが小規模経営者に向けて訴え続けている永遠のテーマです。

- ①正しく“家訓を守り”承継できる会社経営をめざす経営者
 - ②急成長したのに資金繰りに行き詰まり再生に挑む経営者
 - ③長引く経営不振に決断が先送りになり迷走している経営者
 - ④不慮の事故により経営が危機的状態となった経営者の家族
 - ⑤企業再生が失敗に終わり“起死回生”に向けて頑張る経営者
- “万が一”の経営危機を回避するには日頃からの備えが必要です。

※問題が起きる前に社内勉強会にお役立てください。
※出張による少人数制ミニセミナーをお受けしています。

◇発行者 株式会社 ホロニックス総研
◇責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟 士
◇連絡先 〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12
TEL.03-5684-0021 FAX.03-5684-0031

<http://www.holonics.gr.jp>

【ホロニックス】

(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。

すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する (小学館「カタカナ語の事典」より)